

環

(あい)

光耀抄	2
琥珀集	6
瑠璃集	13
瑪瑙集	25
紅玉集	26
5月号月評	28
恵贈句集拝見(32)	30
特別作品「金婚のニュージーランドの旅」	32
高谷栄一句集「嵯峨野」に寄せて	34
共鳴句	36
琥珀集作品鑑賞	38
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ	39
Ⅱ	40
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	41
俳誌交歓	43
他誌転載	44
妣の国父の蒼天(26)	46
環本部句会報	48
エッセイ「陰と陽」	50

今月の一句

花菜漬飯白きこと二三日

桂樟蹊子

(昭和二四年作)

「山米の配給が僅か三日分位あると、また代用食の日が続いた。家内がどこかで花菜漬けを手に入れ白飯に添えてくれた日は正に豪華であった」と自註にある。その頃は、学生を中心に「学苑」の主宰をされていた。戦後の食料困窮のその頃、家を訪れた腹をすかした学生たちに、食事時になると家族と分け合って食事をご一緒されたことなど、ぽつりぽつりと往時を話される師の姿が鮮明に甦る句である。

隆子

一心不乱

塩路隆子

袴まだ固きを遺しつくし摘む
ふらここの軋みすなはち吾が軋み
つくしらの一揆蜂起や古戦場
全長を kullanarak 麟霞食む
芽吹きてふ一心不乱雑木山
葬の日の紅梅少しはしやぎ過ぎ
涅槃図の慟哭に堂揺れてをり

五月号光耀抄

春月や週間過ぎし地震の跡
娘の声の「元氣」に涙春の星
大地震に半旗を掲げ春の湖
鳥の羽根欲しや余寒の大津波
地震の地へ出向く子送り春寒き
いとほしや地震に摘まれし春の夢
紀州藩の汐入り林泉や鴨残り
手土産の「堂島ロール」雛の日
神仏人すべて火が好きお松明
露天湯の岩を離れず春の月
雪明りしづかに含むニトロかな
野良猫の一瞥受けし春田打
海沿ひの菜の花畑一輛車
鴨群れて飛翔滑走湖広き
陽も風も春の息吹や蕪村句碑
花を待つ城下の午鐘殷々と
雨の日は憂ひを眉宇に夫婦雛

笠井 清佑
山崎 里美
竹内 悦子
鈴木 照子
森下 康子
伊藤 憲子
坂上 香菜
田下 宮子
北尾 章郎
坂根 宏子
阪本 哲弘
松岡 和子
片岡久 美子
桂 敦子
伊東 和子
小澤 菜美
落合 晃

塩路 隆子選

ま青なる空へはばたけ白木蓮
 アレル源は紫外線なり春の肌
 宅配荷春風乗せて届きけり
 ナイチンゲール誓詞を唱和卒業す
 西賀茂の畑打つ夫婦ペアルック
 桃の花女性ばかりの検診日
 のどかなり今も健在陀羅尼助
 淋しさに抜くはこべらの素直かな
 集ふ者みんな丸顔雛の宴
 嘶ける絵馬への祈願梅日和
 立ち上がれ被災励ます黄水仙
 ラジオより安否情報おぼろの夜
 安穩の水底見せて春の川
 鳥風に乗りて遙けき黄泉の旅
 乳母車に園児満載クロッカス
 ふはふはの煎餅かじり梅見かな
 雛の日は万葉仮名の語り口
 冬ごもり厨ひねもす煮炊きの香
 臘梅に始まる庭の花絵巻
 磯遊び釣りグレ泳ぐ潮溜り

和田 郁子
 山口キミコ
 三川 美代子
 宮田 香
 長濱 順子
 中村 ふく子
 藤見 佳楠子
 杉本 綾
 宇治 重郎
 塩路 五郎
 紀川 和子
 鷺見 たえ子
 宮崎 左智子
 高谷 栄一
 栗倉 昌子
 新実 貞子
 小西 和子
 吉田 晴子
 中本 吉信
 川崎 利子

開かざる蜆二つや朝餉汁
 一途なるころ抱きて雁帰る
 覆面は杉花粉用強おもて
 畦焼きの煙真直ぐ安土山
 鍾馗像踏ん張る屋根や涅槃吹き
 合格のだるまに両目春の夢
 子授けの絵馬それぞれに梅の宮
 屋根の雪下ろして子らに諭さるる
 年古りし名物茶屋の冬ざるる
 矢絣の嬰の燥ぎけり雛の寿司
 狎を引く官女すませり御殿雛
 花菜摘む農夫の籠のうすみどり
 俵屋の地下足袋春の泥だらけ
 寒戻る悪さの猿また畑に
 如月に利休を偲ぶ茶の湯かな
 寒き朝棺に忍ばセラブレター
 蛇の目傘買ふ大原の春しぐれ
 春寒に敏しや今朝の不整脈
 病める身に春の日差の恋しかり
 針の先ほどの機影や春夕焼

五十嵐 勉
 和田森 早苗
 松田 和子
 松田 洋子
 前川ユキ子
 秦 和子
 西垣 順子
 能勢 栄子
 清水侑 久子
 笹井 康夫
 佐用 圭子
 竹内喜代子
 田中 浅子
 谷口 俊郎
 田村 幸子
 辻 香秀
 辻 知代子
 富田ヒナ江
 上甫木伊都子
 木戸 宏子

春兆す農小屋にある人の影
 春泥を踏みて離るる赴任の地
 かたかたと春の駈足耳澄ます
 直売所賑はす棚の春野菜
 雪の庭石ら黙して座せるのみ
 待ち人の来たる境内梅七分
 まっさらのスニーカー履き春の雲
 春コート買うてわくわくデート待ち
 一木のそれぞれに貌春の山
 春霜や朝日にむかひ番鳥
 くぐもれる暁の梵鐘春の野に
 発つ鳥の影の一瞬春障子
 ストックを胸に抱へし少女かな
 春の朝光る雨滴の数珠繋ぎ
 分限者の豪華雛壇夜商
 マリア像を彫れる燈籠梅の宮
 脳活性に辛子きかせし鶯菜
 残雪の尾根を背にして時計台
 爛酒やひとりで祝ふ誕生日

青山 正英
 井口 淳子
 池田 加寿子
 泉 秀行
 伊藤 和子
 伊藤 純子
 伊庭 玲子
 宇治原 弥幸
 大越 義雄
 大松 一枝
 岡 佳代子
 大島 みよし
 西田 史郎
 山崎 真義
 山本 孝夫
 横田 矩子
 松田 とよ子
 藤本 秀機
 難波 篤直

琥珀集

地震

山崎 里美

春彙核の諸刃の怨めしき
翔けて見む弥生の地震の娘の安否
娘の声の「元氣」に涙春の星
強東風や被災の娘らを連れ出さむ
娘の帰還漸く春夜戻りくる
大津波跡の地獄絵凍返る
被災地に馳せたる想ひ春愁

玉椿

笠井 清佑

鳥帰る

竹内 悦子

助かりし被災者の声涅槃西風
春月や週間過ぎし地震の跡
奈良町に振舞ひ酒やお水取
伝承の「散り椿」咲く伝香寺
種薯を山と積みたる種物屋
塔頭の門前飾る玉椿
探梅や寝仏在すむかし徑

大地震の跡無残なり鳥帰る
みちのくの人の艱難春愁ひ
大地震に半旗を掲げ春の湖
残雪の比良には魔物栖むといふ
杉花粉三井より流れ近江攻め
紫立つ銅鐸村の野焼きかな
安穏な日々樂します牡丹の芽

「ひなのちゃん」

鈴木 照子

鳥の羽根欲しや余寒の大津波

地震跡をそぼ濡らしけり木の芽雨

「ひなのちゃん」てふ子が主役雛祭

ポケットに飴の色々梅盛り

春風にキスされ雲の輝ける

袖繋ぎせしシャツ乾く花菜風

夕東風のケープル駅は「梅屋敷」

目刺焼く

森下 康子

地震の地へ出向く子送り春寒き

放射能の値刻々受難節

改めて気付く感謝や春來たる

児の声に貰ひし元氣春遅き

連日の停電予告東風夕べ

スーパ一の棚は空っぽ目刺焼く

色褪せし古き写真の顔うらら

妣の味

伊藤 憲子

路の臺に程よき苦み邪氣払ふ

膝折りて土の声きく春の庭

ドア開き初音きかむと耳すます

飴色に炊く春大根妣の味

春の雪ふる里のこと母のこと

いとほしや地震に摘まれし春の夢

未曾有の地震と津波や冴返り

桜 狩

坂上 香菜

常備薬忘れ出掛けし桜狩

玉垣に添ふ酒樽やさへづれる (紀州 日前神宮二句)

土筆生ふる脇参道や朝日燦

浮き立てる花の遠景紀三井寺

紀州藩の汐入り林泉や鴨残り (養翠園二句)

干潮の船蔵跡や蜷の道

鳶の声降りつづく浦桜東風 (和歌の浦)

菖蒲の芽

田下 宮子

春風呼ぶは風神雷神図

代々の雛を飾れり旧庄屋

音なきに鼓打つさま古き雛

手土産の「堂島ロール」雛の日

ソーラーで動く人形山笑ふ

スコップをたてかけし馬柵地虫出づ

一病の夫豊鑠と菖蒲の芽

名残り雪

坂根 宏子

角の無き鹿の目静か名残り雪

大和路の大仏館パン春浅き

ワイナリーに春の潮騒響きけり

湯の町に奔流となる雪解水

露天湯の岩を離れず春の月

梅咲きて臨時停車の借菜園

藩校の格子窓より白き梅

お松明

北尾 章郎

大綿もみちの賑はひ日暮刻

太極拳春一番に動ぜざる

ステッキや背筋伸して青き踏み

雪達磨死して目鼻を遺しけり

里山を繕へるかに木の芽張る

のどけしや註釈入れつ句帳繰る

神仏人なべて火が好きお松明

雪明り

阪本 哲弘

煮凝の鯛重たげな臉かな

雪明りしづかに含むニトロかな

外つ国の世直しデモや冴返り

霾りて尖閣諸島隠しける

烏雲にスペイン硬貨兎にやらむ

街籠吊り下げらるる不発弾

故郷を離るるパンダ春愁

梅の里

梅咲けば梅の里とや峡五軒
氷見湾の碧そのままに目刺焼く
廃校となりたる母校すみれ咲く
気品満つ近江上布の雛かな
野良猫の一瞥受けし春田打
息つめて山路に春の鳥を追ふ
枝垂梅を天蓋として野の仏

松岡和子

春夕焼

寒明や雑魚天旨き伊予の浜
海沿ひの菜の花畑一輛車
キャンデーは光のかげら春兆し
白梅を活けし藩校偉人展
本堂に子規の講座や鳴雪忌
段畑の畦火見守る父子かな
海峡の帰船を包む春夕焼

梅見

「合格」の声弾みたり春兆し
手入れ良き松端然と春疾風
芽吹き初む樹々の息吹きに深呼吸
鴨群れて飛翔滑走湖広き
手作りの薔薇チヨコレート春浅き
頬寄せてその一輪に逢ふ梅見
白鳥に間もなき別れ北帰行

桂 敦子

片岡久美子

詩仙堂

東風の道幾曲りして詩仙堂
詩仙の間吾が蒙昧の春の闇
陽も風も春の息吹や蕉村句碑
比叡より暮るる離宮の浅き春
紅梅の風の香雅び小町寺
色彩の春日手繰り万華鏡（万華鏡ミュージアム）
春ゆうべすり鉢の味噌甘く擦る

伊東 和子

菜の花忌

花を待つ城下の午鐘股々と
 大湖の果ては銀いろ菜の花忌
 菜の花の堤やいつも人の影
 啓蟄やがばと堰越え濁り川
 梅花祭訪へぬ未練のひと目暮れ
 飛び梅の由緒の一樹天満宮
 帰らざる白鳥孤高城の濠

小澤 菜美

沈丁花

沈丁や領主の墓碑に辞世の句
 沈丁へ暫し佇む白き杖
 待望の雨連れて来し春一番
 六段を爪弾くは誰春障子
 おかっぱの中に腕白雛の客
 雅楽の音聞こへて来さう雛の宵
 雨の日は憂ひを眉宇に夫婦雛

落合 晃

桃の花

人形に艶のある笑み桃の花
 棟ごとのナース詰所の紙雛
 読み返す旅のしをりや春炬燵
 忘ずるは幸の始まり山笑ふ
 家ごとに椿咲きぬるむかし路地
 まさをなる空へはばたけ白木蓮
 春風を連れて堂々パンダ来る

和田 郁子

春の雪

春の雪降りてたちまちシャーベット
 アレル源は紫外線なり春の肌
 ブルドーザーの掬ふ瓦礫や日脚伸び
 襟立てて渡る宇治橋風の中
 春暁を待つ病院の非常口
 水温み河川工事の捗れる
 杉花粉浴びつ病院巡りかな

山口キミコ

黄水仙

三川美代子

西賀茂

長濱 順子

怪獣と見たる噴煙春浅き
佇めば梅の香仄か溪の風
麗らなり上野の森にパンダ来る
古書店の書架に一茎黄水仙
宅配荷春風乗せて届きけり
春耕や畝黒々と真直なる
女性とて建築士なり山笑ふ

神木の切株に注連木の芽風
蓮月尼の棲みたる庵梅楚々と
春の雲神先導の八咫鳥
門柱の石像武官長閑なり
端然と李朝の白磁春浅き
西賀茂の畑打つ夫婦ペアルック
緩やかな参道濡らす春時雨

春 雪

宮田

香

糸遊

中村ふく子

春雪の長靴土間に大家族
ナイチンゲール誓詞を唱和卒業す
蹄鉄をしかと若駒デビューかな
落書きの残る机や卒業期
懐かしの枝雀の落語放送日
大福帳提げし陶狸やうららなる
医療費の嵩張る齢納税期

桃の花女性ばかりの検診日
ロボットのフルマラソンや暮遅し
啓蟄や目鼻うるうる始まれる
春眠やまず関節を目覚めさせ
糸遊を視てゐる窓辺カプチーノ
居住ひを正し老舗の雛の膳
春泥を一つ跳びとはままならず

吉野山

藤見佳楠子

大 櫻

宇治 重郎

しづけさの蔵王堂にて初音聞く

のどかなり今も健在陀羅尼助

義経の落ち行きし径雉子鳴く

草餅に憩ふひととき吉野建

人人の花を謳歌の吉野山

待たすより待つ間樂しや花の下

春愁や鏝で刻む辞世の句（如意輪堂）

はこべら

杉本

綾

象の影

塩路

五郎

亡き夫の遺影にチヨコや春浅き

独り居の庭の慰め犬ふぐり

囀りをぴたとやめをりこぼれ飛び

鶯のそのひと声の弾みかな

庭石のこぼれ沈丁香の強し

淋しさに抜くはこべらの素直かな

師も交じへ春の宴のシャンデリア

集ふ者みんな丸顔雛の宴

春疾風梢の靡く大櫻

真つ新の黒スーツ着て新社員

白濁の蛤汁や宴半ば

紅梅の色艶やかや天満宮

陽光に輝き奏で春の水

街灯の遅き点灯日脚伸ぶ

梅ふふむ明日香の風や廃寺跡

紅梅の空啼き交す鳥の群

古墳より生れし蒲公英孤独なり

口開けし埴輪くすぐる春の風

象の影大きく揺れて春日遅々

陽炎やじつと反芻白うさぎ

嘶ける絵馬への祈願梅日和

瑠璃集

春の川

宮崎左智子

家並ひくき街道つづく深雪晴
ものの芽の地を裂く力吾に欲し
安穩の水底見せて春の川
無垢と云ふ田舎育ちや露の臺
無抵抗な吾に小礫春疾風

尉 鷄

紀川 和子

詩人の古城の句吟虚子忌日
朝食の窓をのぞきて尉鷄
ジェット機の早さでせまる春津波
牙を剥く世紀の地震や三・一一
立ち上がれ被災励ます黄水仙

鳥 風

高谷 栄一

春寒し托鉢僧の草鞋沁む
一族を川に遊ばせ春の鴨
海鳴りの大磯荒し梅の宿
鳥風に乗りて遙けき黄泉の旅
受験へと胸に鉢巻熱気満つ

巨大地震

鷺見たえ子

クロツカス

粟倉 昌子

ちちはは
考妣に捧ぐ可憐な黄水仙
唐突の巨大地震や春の昼
ラジオより安否情報春の夜
春津波の呑み込みし町壊滅す
被災者に二重の苦悩放射能

乳母車に園児満載クロツカス
春めくや何処かに児らの弾み声
春一番花粉まみれとなりけり
諸子どき講釈多き太公望
はかどらぬ体調管理二月果つ

五月号月評

塩路 隆子

この度の東北関東地方を襲った未曾有の大地震及び津波、それに加えて原子炉の損傷による放射能への恐怖は日本列島全体を、いや世界を震え上らせている。締切りが毎月十五日であるから、地震の後四日間に作られた句を中心に、今月はこの災禍を詠んだ句を琥珀集・瑠璃集の巻頭を選ぶことにした。短期間によくこれだけ胸を打つ良い句を作られたものと感動している。

月評は先月に引き続き瑠璃集を中心にさせていただけ。

立ち上がれ被災励ます黄水仙

紀川 和子

大地震に被災された方たちを励ますメッセージである。冬に咲く日本水仙に比べると、春の季語である黄水仙は南欧原産であるから華美で力強い印象を受ける。まるで被災者に「立ち上がれ」と励ましているかのよう。

ラジオより安否情報春の夜

鷺見たえ子

二万人に及ぶ亡くなった人や行方不明者を探す情報が昼夜を分かたず流れている。それを聞く手立てもない人たちの不安は如何ばかりだったであろうか。作者が聞き耳を立てて情報を収集されている様子が窺われる。

乳母車に園児満載クロツカス

粟倉 昌子

安心して子供を保育所に預けて働くおかあさんが増えている。乳母車は「園児満載」である。笑顔の子、中には泣く子も、眠っている子もいるかもしれない。「クロツカス」の季語が句を引き締めている。リズムのいい作品である。

ふはふはの煎餅がじり梅見かな

新実 貞子

作者はいつも少し違った観点の句を発表される。今回も「ふはふはの煎餅」と「梅見」の無関係とは言えない意外性が面白い。「ゲゲゲの女房」を始めて句にされたのもこの作者である。注目している作者の一人である。

雛の日は万葉仮名の語り口

小西 和子

先月は「雪降りて時間長者となりけり」の句を発表された作者である。その時「我が家は時間だけでなく何にでも長者とつけるんです」との話を受けた。楽しいご家庭である。雛の日には「わらわにお茶をたも」など御殿言葉の平安時代にタイムスリップした家庭の様子が窺える作品で楽しい。(以下略)